

概要

- 国内での業務用米需要や、本県において作付面積が減少傾向であった極早生品種「ハナエチゼン」の代替として、「島根県多収穫米推進協議会」に加わり、**新品種の選定**を行った。
- 島根県農業技術センター技術普及部では、試験研究部門と各地域農業部を繋ぐ組織として、「つきあかり」の選定に加わり、また**栽培指針作成から現地栽培指導、また優良種子の確保**等に携わり、円滑な導入に対して支援した。
- その結果、平坦部を中心に導入が進み、令和6年には、「ハナエチゼン」からの**完全転換**が実現した。
- 今後、平坦部での拡大や、中山間地域での導入が期待される。



精米袋のマーク

具体的な成果

1 収益性の実証

- 令和5年展示ほにおける売上額（JA出荷）は、平坦部早植えほ場の平均反収によると、本県主要品種「コシヒカリ」を上回ることを確認した。

2 「ハナエチゼン」からの転換

- 「つきあかり」の作付面積は、令和4年35ha、5年96haに拡大し、6年は約200haとなった。近年における「ハナエチゼン」が200haであったことから、着実に転換が進んだと考えられた。

3 県産優良種子の確保

- 優良種子の確保に向けて、令和4年の準備ほ場を経て5年から採種を開始した。令和5年は高温登熟の影響が懸念されたが、発芽率や外観品質の基準を満たす種子を一定量確保できた。

普及指導員の活動

令和元年～5年度	■ 県現地展示ほの調査や栽培指導支援を行い、作柄分析や特性把握、課題整理を繰り返した。
令和2年～5年度	■ 行政により生産者や実需者また県関係者により設立された「島根県多収穫米推進協議会」に参画した。 ■ 協議会では品種選定等が協議され、現地（品種比較試験）展示ほの生育状況や栽培管理、実績等について情報を提供した。
令和4年～5年度	■ 試験研究部門と協力して、生育モデルや栽培暦を記載した栽培指針を作成して生産者や関係者へ配付した。 ■ 検討にあったては、現地において問題となった出芽特性について試験を行い結果を掲載、また収量や生育モデルの提案等を行った。
同上	■ 採種ほでの栽培指導を行い、優良種子を確保した。

普及指導員だからできたこと

- ・ 農業革新支援センターとして、試験研究部門と各地域農業部、また行政のパイプ役となり、生育状況の共有や現場課題の集約を行った。
- ・ 「つきあかり」の育成地や試験研究部門のデータ、また担い手の生産状況をトータルで把握し、生産拡大ビジョンを示し、引き続き生産拡大に向かっている。

みんなで取り組む水稲新品種「つきあかり」の導入

活動期間：令和2年度～（継続中）

1. 取組の背景



図1 精米袋のマーク

「つきあかり」は、約20年にわたり本県の奨励品種として栽培されてきた極早生品種「ハナエチゼン」の代替として、令和4年2月に島根県農産物種子等生産品種に採用された。

近年、国内では中食・外食向けの業務用米需要（手頃な価格で大量に安定供給される米を重視）が伸びており、本県では「島根県多収穫米推進協議会（事務局：農山漁村振興課）」が核となり、生産コストの削減にも繋がる多収穫品種の導入が検討されてきた。一方で「ハナ

エチゼン」は、実需からの需要が低迷しており、作付面積が減少傾向であった。こうした中、試験研究部門による品種比較試験、実需者による食味試験、そして普及組織による現地適応性の評価等が重ねられ、良食味多収品種として「つきあかり」が選定され、平坦部を中心に導入を図った。

2. 活動内容（詳細）

（1）県現地展示ほの運営支援

各地域農業部が県内各地に設置した展示ほにおいて、調査や栽培指導支援を行った。

また得られたデータを集計して作柄分析や特性の把握、また課題の整理（健苗育苗、初期生育の確保及び倒伏対策等）を繰り返した。

（2）安定多収栽培指針の作成

試験研究部門と協力して、生育モデルや栽培暦を記載した指針を作成して生産者や関係者へ配付した。

作成にあたっては、現地において問題となった出芽特性について実際に試験を行った結果を掲載した他、生産者や指導者が迷う機会の多い穂肥施用の目安、また収量目標や生育モデルの提案等を行った。

（3）栽培管理情報の発信

移植後30日頃また出穂期に実証ほや試験研究部門の生育状況をまとめ、情報提供した。また、これらの状況を基に島根県農業振興協会が関係者

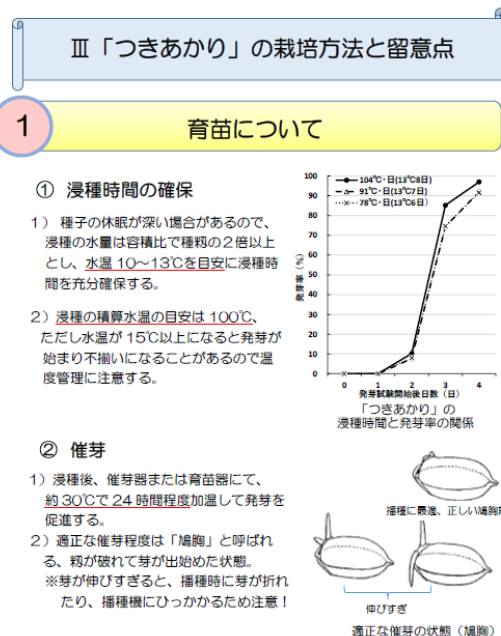


図2 安定多収栽培指針（抜粋）

等に向けて発行する「米づくり技術情報」に当面の栽培管理対策を投稿し、適期の栽培管理を促した。

(4) 「島根県多収穫米推進協議会」への参画

生産者や実需者また県関係者により設立されたこの組織において、展示ほの生育状況や栽培管理、実績等について情報を提供した。

(5) 採種ほでの栽培指導

採種については、島根県農産物種子等生産品種に採用された令和4年に関係者間での協議により準備ほ場が設置され、令和5年から始まった。

「つきあかり」は出芽時に長時間暗黒条件におくとメソコチル（中胚軸）が伸長しやすい出芽特性があることから、特にこの期間の適切な温度管理について現地巡回で指導した。また、異型株や罹病穂の確実な除去に向けては、研修会を開催し生産者自らが行う自主審査の徹底を図った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 収益性の実証

令和5年展示ほにおける売上額（JA出荷）は、平坦部早植えほ場の平均反収によると、本県主要品種「コシヒカリ」を上回ることを確認した。

表1 令和5年展示ほにおける売上額の比較（/10a）

品種	収量 kg	売上額 円	備考
つきあかり	610	115,954	坪刈収量
	525	99,655	ほ場収量
比) コシヒカリ	480	96,800	ほ場収量推定値

注) 売上額はJAしまね概算金（2等）、支援金及び追加金により算出
「つきあかり」の収量は平坦部早植えほ場の平均値

(2) 「ハナエチゼン」からの完全転換

「つきあかり」の作付面積は、令和4年35ha、5年96haに拡大し、6年は約200haとなった（JAしまね種子販売実績から推計）。

近年における「ハナエチゼン」が約200haであったことから、転換が着実に進んだと考えられる。

(3) 県産優良種子の確保

令和5年産種子は、高温登熟の影響が懸念されたが、収穫された種子の発芽率は基準である90%を上回り、外観品質が良好で、また令和6年の目標面積（300ha）分を概ね満たす量の優良種子を確保できた。

4. 農家等からの評価・コメント

- 令和5年は、「コシヒカリ」等の他品種が高温登熟により低収であった中「つきあかり」の平均反収は10俵前後、また品質面でも農産物検査で1等であり一番良かった（出雲市T氏）。
- 反収がまだ安定しない点は不安に思うが、食味が良くお客さんの評判が良いため、継続して作付けしたい（益田市A法人）。

5. 普及指導員のコメント（所属・役職・氏名を記入）

- 技術普及部と地域農業部、また研究と行政が協力しながら、品種の選定や特性把握、栽培方法の確立に取り組めた（島根県農業技術センター技術普及部・農産技術普及課長・松崎友史）

6. 現状・今後の展開等

「つきあかり」のライフステージは、導入期から成長（拡大）期へと移行している。

本県では、平坦部の「コシヒカリ」が長年において品質が低迷している。一方で担い手の規模拡大が進んでおり、適期の移植や栽培管理が難しくなっている。そのため、今後は「コシヒカリ」からも「つきあかり」への転換を進め、担い手における品種構成の適正化し、作業分散を図る必要がある。

技術普及部では、安定多収栽培指針を基に平坦部での栽培技術の普及を図る。また、山間試験地では、平坦地と比べ草丈が低い傾向があり、さらに登熟温度が低いことから、倒伏を回避しつつ更なる多収が期待できる。このため、（中）山間での生育モデルを作成し生産拡大を進めたいと考えている。